

御言葉に意味を吹き込むのはあなた

4月9日にイースターを迎え、今日は復活節第4主日の礼拝を神様にお捧げしています。ここしばらくの礼拝ではヨハネによる福音書に記されているイエス様復活の場面を聖書箇所に取り上げさせていただきましたが、今日は日本キリスト教団出版局が出している『日毎の糧』という聖書日課を用いて聖書箇所を決めさせていただきました。

『日毎の糧』では、本日4月30日のテーマが「命のパン」となっています。イエス様こそ天から降って来て、その身を人々に分け与えることによって世のすべての人々に永遠の命を与える「命のパン」、十字架と復活の御業によりすべての人々に命を与える、かつての「マナ」のような神様からの贈り物に他ならない。そのことを礼拝においてしっかりと覚えようということでしょう。

『日毎の糧』ではこのテーマに関連の深い箇所として、出エジプト記 16:4～16、第一コリント書 8:1～13、ヨハネによる福音書 6:34～40、詩編 78:23～39 の4つが取り上げられていました。今日はその中でも出エジプト記を、『日毎の糧』が記すよりも少し前の箇所から取り上げて、16:1～16 を聖書箇所にしたいと思います。そこには果たしてどんなことが書かれてあったのでしょうか。

昔々、イスラエルの人々はエジプトで奴隷状態に置かれていましたが、これを見た神様はモーセを預言者として立て、海を二つに割るという奇跡も行ってイスラエルの人々をエジプトから脱出させました。これが有名な出エジプトの出来事です。その後、イスラエルの人々は荒れ野をさまようこととなります。するとどうでしょう。エジプトを脱出した時にはあれほど「神様万歳！神様は偉大な方だ」と神様を賛美していたにもかかわらず、イスラエルの人々は神様に不平を言い出しました。「ああ、自分たちはエジプトで死んだ方が良かった。エジプトでは肉がたくさん入った鍋を食べていたのに、ここでは飢え死にしそうだ。神様は自分たちを飢え死にさせるためにエジプ

トから脱出させたのか」。

本当に人間というのは勝手ですね。自分のご都合主義で神様に接します。自分に都合の良い恵みがあるうちは神様をほめたたえるけれども、それとは正反対の状況に置かれたとたんに神様に文句を言い始め、神様に背を向けてしまうのです。

けれども、神様はそんなイスラエルの人々を決してお見捨てになりませんでした。夕方にはうずらを与え、朝には、「これは一体何だろう(マーン・フー)」と人々が口々に言ったことから「マナ」と呼ばれることになる不思議なパンをお与えになったのです。こうして、イスラエルの人々は荒野の中、その命を神様に養われました。

これが今日のお話です。このお話は今の私たちにとってもとても大事なことを教えてくれています。先程も申し上げましたように、本当に私たちの信仰というのはともすればご都合主義になりがちですけれども、そんな私たちを神様は決して見捨てることなく心を砕き、その命を養ってくださるのです。

今日の聖書箇所では神様はイスラエルの人々に「マナ」を与えて、その命を養ってくださいました。そして今からおよそ2000年前にはイエス様という「命のパン」を与えて、すべての人々に永遠の命を与えてくださいました。それだけではありません。神様は今も毎主日の礼拝で私たちに「御言葉」を与えて、私たちの命を養ってくださいます。

でも、私は時々思うのです。教会は往々にして神様の「御言葉」をただの言葉にしてしまっていないかと。先日、テレビでマーク・メロさんという方が子供たちにお話しした講演の動画が放送されていました。このマーク・メロさんという人はアメリカの元プロレスラーですが、若い頃はぐれて悪い友だちとつるみ、深夜2時～4時に酒に酔って帰宅する日々を過ごしていたと言います。マークが帰ると、お母さんはいつも電気をつけてマークを待っていました。彼を心配したお母さんは、彼が無事に生

きて帰ってくるのを確認するまでは、決して寝ずに待っていたのでした。昼も夜もマークと会話がなく、彼を心配していたお母さんは彼が帰ると、「今夜はどうだったの？一日中あなたを見なかったわ。お願いだから少し話しましょう」と言葉をかけるのですが、マークはその気持ちもわからず、ひどい言葉をかけてはお母さんを突っぱねて、部屋に入ってしまう。

そしてマークは薬物にまで手を出し、「自分はドラッグのやりすぎで死にそうになったことが三度ある」と講演の中で語るほど命を失いかねかないリスクまで冒すのでした。しかし、そんな彼をお母さんは決して見放すことなく信じて、支え続けたと言います。

その後プロレスラーとして成功を収めたマークでしたが、プロレスのワールドツアーで広島に滞在していた夜中に突然お母さんの訃報を受けます。ホテルを飛び出し、広島の街を夜中にあてどなく歩き回り、空を見上げて「お母さん、ごめんなさい」と叫ぶマーク。葬式のために帰国し、お母さんの棺に近づくにつれ、母を初めてきちんと見たような気がしたと言います。「お母さんは僕のヒーローだ。今の僕がいるのはお母さんのおかげだ。僕を愛し、生を与えてくれた。そして唯一僕を信じてくれた」。棺の中に横たわるお母さんにそう声をかけながら、マークは考えました。「それを私はどう返した？」、「酔っ払い、ハイになり、馬鹿をして悪い友だちと付き合っ…。彼女が唯一望んだのは自分と話すことだったのに…」。

「今母と話せたらどんなにいいか」とマークは講演の中で語ります。「お母さんが今の自分を見てくれたら…。なぜ良い息子になれなかったのか…。そして子どもたちに語ります。「私たちは自分の選択で人生を決めていく」と。「自分は悪い友だちとつるみ、酒やドラッグに溺れて恋愛や人間関係、夢をぶち壊した。死にそうにもなった。その後も、プロレスで勝って名声を得て金持ちになることしか頭になかった。人生の競争に勝つことしか頭になかった。それ故に結婚生活も家族も友だちもすべて失った。それは自分が世界でたった一人の孤独になるためだったのか？」

そしてマークは訴えます。「そこから学んだのは、人生や家族がいかに貴重な贈り物かということだ。そしてそれらは長くは続かないんだ。家族がいるなら、家に帰って何よりもまず家族を愛してほしい。愛はただの言葉だ。誰かがそこに意味を与えない限りはね。その意味を与えるのはあなただ」と。

家族について考えさせられるお話で、家族を愛する一瞬一瞬を大切にしようと思わされました。しかし私は同時に「愛はただの言葉だ。誰かがそこに意味を与えない限りはね」という言葉から、牧師としてチャレンジを受けたような思いがしたのです。聖書の御言葉、そこに込められているのは究極的には神様の愛だと私は思います。聖書の御言葉には神様の愛がたくさん詰まっている。実際、聖書には愛という言葉がたくさん出てくる。でも、誰かが意味を与えない限り、それはただの言葉のままになってしまうのだと思わされたのです。

ここにいる一人ひとり、神様から受ける愛の恵み、その偉大さは自らの経験を通してよく分かっています。「これが聖書の御言葉が伝える神様の愛か」と教会に集う多くの方が感じているかもしれない。でも、それはどのようにして伝えられたのかというと、もちろんそれぞれの人が人生のどこかで直接神様と出会うような証的な経験もあったと思うのですが、教会に通う人との触れ合いを通して間接的に伝えられたという人も多かったのではないのでしょうか。

ヤコブの手紙1:22に「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません」という御言葉が出てまいります。そして25節には御言葉を行う人について、「このような人は、その行いによって幸せになります」と記されています。御言葉を行うことで、そこに込められている神様の愛が自分にも他人にも身に染みて分かってきて、人を幸せへと、また神様のもとへと導くのです。しかしもしも教会で御言葉が実践されなかったら、ただ教会で御言葉が、また「愛」という言葉だけが語られるだけだったら、それは単なる言葉で終わってしまいます。残念ながら今の日本の教会の宣教が上手くいかないのは、そういう教会が多いからではない

でしょうか。

「愛はただの言葉だ。御言葉もただの言葉だ。誰かがそこに意味を与えない限りはね。その意味を与えるのはあなただ」。この礼拝のひと時、私たち一人ひとりが愛の伝え手、御言葉の伝え手であることをしっかりと心に留めましょう。私たちの心に愛と御言葉を宿して、それを大いに実践していきたい。そして神様の愛と御言葉をどこまでも広く宣べ伝えていきたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——